

## 62

## 七表八裏九道における数脈の位置

誌上発表

中川 俊之

日本鍼灸研究会

## 1 緒言

現在、数脈は遅数と対となり、寒熱を表す代表的脈状とされる。しかし、経絡治療家・岡部素道の研究や、『東洋医学概論』（東洋療法学校協会・一九九三年版）により知られる脈状分類・七表八裏九道には数脈の記載が無い。本発表は、この問題に対する小考である。

## 2 歴史上の数脈

『素問』『靈樞』諸篇に、「数則煩心」、「沈細数散者、寒熱也」、「乍疎乍数曰死」、「且大且数、名曰溢陽」などがあるが、遅数を対とする記述は『素問』陰陽別論篇の一例に止まる。遅数にて寒熱の脈状となるのは、『難経』九難の規定からである。

## 3 歴代の脈状分類と七表八裏九道について

脈状分類について・・・『靈樞』邪氣藏府病形篇、『難経』四難、『傷寒論』卷第一・弁脈法などには、複数の脈状を分類した記述がある。しかし、脈状分類の規範となったのは『脈経』卷第一・脈形状指下秘訣第一の二十四脈状である。これ以後、脈状数は十八種～三十種程度、分類法は相類分類、陰陽分類、七表八裏、七表八裏九道、相対分類などの変遷がある。

七表八裏九道について・・・『脈経』以来の二十四脈状を七表、八裏、九道に三分した分類法である。唐代の陰陽分類（陽脈と陰脈の分類）から派生し、七表八裏を経て七表八裏九道となった。七表八裏の最も古い記述に、敦煌文書『七表八裏三部脈』（唐代頃）があるが、『太平聖恵方』卷第一には、より整序された配列が見られる。次いで『脈粹』にて九脈状が加わり、二十四種の脈状分類となった。「七表八裏九道」の名称は『通真子補注王叔和脈訣』を初出とする。

## 4 北宋までの脈状分類における数脈の有無

数脈を含む分類・・・『脈経』二十四脈状において、数脈は「来去促急」の脈状であり、滑脈と相類とされる。敦煌文書『平脈略例』、『亡名氏脈経第二種』にも、滑脈と相類とする記述がある。『千金方』卷第二十八では遅数を相対に配置する（条文は『脈経』引用）。北宋までの脈状分類において、遅数を相対とするのは『難経』の他、『千金方』のみである。

数脈を含まない分類・・・対して、陰陽分類の敦煌文書『玄感脈経』や、陰陽分類から派生した七表八裏の分類（『七表八裏三部脈』、『太平聖恵方』、『類証活人書』など）、七表八裏九道の分類（『脈粹』、『王叔和脈訣』）には全て数脈が存在しない。『千金翼方』卷第二十五の脈状は、配列、条文ともに『玄感脈経』との関連が示唆されるが、数脈を『脈経』の数脈条文から補完している。

## 5 中心的脈状ではなかった北宋までの数脈

『難経』『千金方』以外は遅数の相対でなく、『玄感脈経』は記述すらない背景には、北宋までの数脈（遅数）の扱いが関係すると思われる。

北宋までの脈法は、『脈経』、『千金方』卷第二十八、『千金翼方』卷第二十五、『太平聖恵方』卷第一にて大概をつかむことが出来る。これらを通覧すると、寒熱を表す脈状には、〈(熱) 洪大、滑疾〉、〈(寒) 細小、沈細〉などがあり、必ずしも寒熱=遅数ではないことが分かる。

## 6 南宋から重視される数脈

数脈が中心的な脈状となるのは、『三因極一病證方論』からである。当書の脈状分類には、①七表八裏九道、②二十六脈状、③四脈がある。

①七表八裏九道では、『王叔和脈訣』の配列の内、九道脈の長脈、短脈を削り、替わりに数脈、散脈を記述する。

②二十六脈状は相対分類で記載され、数脈は『千金方』以来の遅数相対となる。

③四脈（浮沈遅数）は、陰陽寒熱の把握と脈状の統括を目的に、新しく構築された枠組である。この四脈にて数脈（或いは遅数）は寒熱弁別の最重要脈状となった。

## 7 まとめ

南宋以後、四脈（浮沈遅数）の登場により数脈は中心的な脈状となった。『三因極一病證方論』における七表八裏九道への数脈追加はその表れである。一方、『王叔和脈訣』は数脈を加えないまま、多くの注解書が流行し、数脈の無い七表八裏九道が一般的となった。